

---

## 桜が薫うキャンパスを夢見て

熊本保健科学大学学長 小野友道

---

一年前の平成二十一年三月二十一日、春風が心地よいらかな日、熊本北ロータリークラブの会員と熊本北ロータリーアクト、そしてその姉妹クラブである台湾の台北羅馬ロータリークラブ会員の総勢五十六人が、熊本保健科学大学キャンパスに集合してくださった。これから始まる百本の桜の植樹のためである。われわれの大学側からはボランティアの学生と教職員合わせて五十人をお迎えした。

熊本北ロータリークラブ（福浦裕二会長）は昭和五十四年に創立され、平成二十一年めでたく創立三十周年を迎えられた。その記念事業の一つとして桜百本の植樹を企画され、熊本保健科学大学のキャンパスを、その場として選んでいただいたのである。

時あたかも、銀杏学園熊本保健科学大学は、平成二十一年、学園創立五十周年の年であった。本学園の設立母体である財団法人化学及血清療法研究所に、本学園の始まりである「化血研衛生検査技師養成所」が設立されたのが、昭和三十四年であった。

この記念すべき年に、熊本北ロータリークラブからのお話はありがたく、またお祝いの重なり偶然に感激した。加えて、私自身もまた熊本北ロータリークラブの会員でもあったので、その喜びは格別なものとなった。

本学1号館は直径百三十メートルの円形校舎である。その周りを中心に桜の苗木が、約百人に及ぶ皆様によつてあつという間に植えられた。それは、ローターアクトの一人で造園業に携わつておられる西川幸司さんが前日から周到な準備をされ、プロの人たちにより前もつて植樹のための百の穴が掘られていたおかげであつた。南側の校舎近くには三メートルを超す桜が一本用意され、熊本北ロータリーの西川毅彦会長、台北羅馬扶輪社の謝禮興会長、そして私の三人で記念の植樹をさせていただいた。その後、桜は皆元気で育つてきている。このことにあらためて感謝の意をささげたいという気持ちも私も大学にふつふつとわいてきた。その願いが今日のシンポジウムの開催として実を結んだのである。

\*

本シンポジウムを企画するに当たり、熊本北ロータリーの北野正司会員が金春流の能楽をたしなんでおられるのを知り、厚かましく「能と桜」について何かお話をとお願ひしたところ、金春流松融会の藤本祐治さんにお願ひしてくださつた。そして本学内に本格的な能舞台が設置され、金春松融会の皆様によつて「船弁慶」を演じていただけることになった。

さらに、俳人長谷川權さんの「山桜百万本植樹計画」を知つた。長谷川さんは熊本のご出身で日本を代表する俳人である。現在NPO法人「季語と歳時記の会」の代表をされておられる。また、雑誌「ロータリーの友」のROTTARY俳壇の選者もなされ、ここでもロータリーとのご縁をいただいている。その長谷川さんに特別講演をご快諾いただくことができ、文字通り本シンポジウムに花が咲いたのである。長谷川さんのお話には、日本人の桜好みの究極の理由も明らかにさ

れている。講演にあわせて本大学キャンパスに山桜を植樹することとなった。さらに福島県三春の枝垂れ桜を熊本に咲かせようと、その幼木を提供されている益城病院の犬飼由貴子会長にその志を伺うことができた。本学にも二本ご寄贈いただいたが、今、キャンパスで元気に若葉を大きくしている。

このようなご縁ができた機会に、われわれは桜についてもっと知りたい欲望に駆られてしまった。幸い慶誠高校の武藤哲夫先生が桜に詳しいとお聞きしたので、植物としての桜の講演を受けていただいた。先生は桜の天狗巢病の予防・治療に長年取り組まれておられる方である。また熊本地方気象台の石田尾拓司台長が桜の開花などについてお話ししてくださることとなった。気象台の仕事について、特に生物季節観測は興味尽きないお話の中に地球温暖化のただならぬ感じを受けたのである。

\*

さて、日本人誰もが桜の思い出を持っている。それは入学の喜びか、はたまた戦争と結びつくのだろうか。ロータリーの西川毅彦さんの桜の受難の思い出も考えさせられる出来事である。

私はなぜか徳富蘆花の『自然と人生』のなかの「櫻」を思い出すのである。

櫻

二十餘年の昔、一個の童、一個の成人に手を引かれて肥後の木山と云ふ田舎町を過ぎ居たりき。時は明治十年にて、童は戦争を逃げて親戚の家に行く途中なりけり。

木山町には、薩軍の本營を置き、病院を設けたれば、所として薩人ならざるはなし。大小不

同の小銃を稲塚の如く積みたるあり。泥塗れの青毛布を曝らして、虱をとりつゝこくりく居睡るあり。股引の破れを繕ふ男あり。鐵砲の掃除しつゝ聲高に語るあり。童は右を見左を見、分からぬ薩語に耳を轟かし、恐るゝ連れなる男の手につかまりて行きぬ。敗北打續き、弾糧乏しく、運命日に蹙る陣中にも、猶笑ふ可き餘裕はありけるにや、此處其處に高聲の笑語も聞へぬ。賊と云へども、鬼にもあらざりしと思ひつゝ童は猶も歩み行きけるに、向ふより歩み來る男あり。鼠色の洋服の甚く色褪めたるを着て足駄穿き、朱鞘の長刀を落し挿しにし、左手は繃帶して頸より釣り、右手に今を盛りの山櫻一枝持ちて、ぶらりゝ歩み來りしが、忽ち側の店先きに刀を磨げる男に呼びかけられて、彼櫻の枝を朋輩の鼻さきに突つけ、何やらん早口に二言三言口走りつゝ、呵々と打笑ひつ。恰も側を過ぐる童に其櫻の枝を與へて、「恐ろしかンぢやつトな。はゝゝゝ」

笑ひすてゝ去りぬ。

櫻は半里ばかり童の手に持たれて、遂に道側の小川に投げ込まれぬ。

童は今此事を記す吾なり。彼櫻を呉れし朱鞘の男は何と云ふ男ぞ。如何になりしぞ。沓として知る可からず。されど二十年來櫻花を見る毎に、彼朱鞘の男は何處よりか飛び來つて、髯として吾前に現はるゝなり。

私が今年も訪れた田原坂の桜は青空の下、見事に咲いていた。この桜を眺めながら、この蘆花の「櫻」を思い出したのである。長谷川さんは「雪月花」と云うとおり、桜は季語の中でもつ

とも重要な季語のひとつです。ところが、先の戦時下では軍国主義の象徴とされ、そのためにいまだに桜にわだかまりを感じている人々があります。そこで当会では戦争によって損なわれた桜の名誉を回復し、昔のようにすべての日本人が晴々と桜を愛でることができるよう、毎年、全国各地で山桜の植樹を行うことにしました」と述べておられる。

私どものキャンパスの百本の染井吉野そして百本の山桜、さらに二本の三春の紅枝垂れが大きく成長し、いつまでも、誰にでも愛され、未来の童たちを、学生たちをにおうが如く咲いて迎えてくれることを願うのである。シンポジウムを基にしたこのブックレットのタイトルは植樹した二百二本の桜をそのまま表現し、長谷川権さんの俳句から―花びら遊びて、をいただいた。

#### 参考資料

徳富蘆花『自然と人生』岩波文庫、一九九九年